

子ども達に優しいわらべうた

『こーいのこーいのたきのぼり』(鯉の鯉の滝登り)と母がよく孫を横抱きにしてあやしていました。『なーこかい、とーぼかい、なこよか、ひっとべ!』(泣くのか、跳ぶのか、泣くくらいなら跳べの意)と叫びながら近所の友達と水路や畦跳びをして競い合いました。どちらもわらべ歌です。音階はありません。節をつけて言い合っていたのを思い出します。

わらべ歌は、その地方独特の特徴があります。また、音階があったりなかったり…。口伝で伝承されてきたため、歌詞や言い回しが微妙に違います。音階のあるわらべ歌は、ドレミファソラシドの、ファとシを抜いた7音で構成されており、耳や言葉が未発達な子ども達に優しい音楽と言われています。そんな素朴なわらべ歌を社協3園は、教育保育の中に取り入れています。

0歳児(ばら組)さんは、保育教諭と一対一で、顔や身体を撫でたり、揺らしてもらってわらべ歌を喜びます。特定の大人との愛着関係を持つのにピッタリです。

1.2歳児(たんぽぽ、さくら組)になると布に、人形を横たえて2人で左右に揺らしながら『かごかご、じゅうろくもん…♪』とあやして遊びます。自分達が大人にもらったことを人形にしてあげる姿は、とてもかわいらしいです。

3.4.5歳児(ひまわり、ゆり、すみれ組)は、『たけのこめだした』などじゃんけんて勝ち負けを決めるわらべ歌。『いち、にの、さんものしいたけ…』などの数え歌。『ゆうびんやさん』をはじめとするなわとび歌。そして『はないちもんめ』『からすかすのこ』『あぶくたった』などは、遊び方も複雑になる集団で遊ぶわらべ歌です。3歳未満児クラスのわらべ歌は、愛着やスキンシップが主になりますが、3歳以上児クラスのわらべ歌では、じゃんけんや数、言葉の掛け合い、複雑なルール、勝敗などが入り込んでいて正に、子どもの発達に、合った遊び歌だと言えます。

私達が生まれるずっと前から家庭や地域の中で歌い継がれてきたわけですから温かいものを感じます。園では、大人がわらべ歌を伝えそして歌や遊び方を覚えた5歳児(すみれ組)さんが、年下の友達に教えてくれます。わらべ歌遊びも子ども同士の伝えあいや伝承が息づいています。

子どもさんが泣いたり、ぐずった時に、知っているわらべ歌を優しく歌ってみてください。結構、落ち着きますよ。(歌うこちらも落ち着くような気がします) わらべ歌には不思議な力があるように感じます。

*『アクティブラーニング』=『主体的・対話的で深い学び』

「あーーいた！」園舎の外壁に、ヤモリを見つけた時の子ども達の歓声。一日に何回も…。ヤモリは『家守』と書くそうです。字のごとく家の守り神のように壁にへばり付いています。それもベランダの天井程の高さに潜んでいます。そのたびに、保育士が呼ばれて捕獲です。一昨日は、肌が透けるほどの白いヤモリを発見。体がこれまでよりも大きく、子ども達は大興奮。「背中が白いね。何でかな?」「メスなのかな?」「図鑑で調べよう」など。5歳児(すみれ組)の男の子達のやり取り。

この一匹のヤモリから子ども同士の「あーでもない、こうでもない」の意見や提案が飛び交いました。このやり取りは、幼児教育の専門用語で、『アクティブラーニング』と言います。受け身ではなく、子ども自身が主体的に友達同士で考えや意見を言い合いながら決論に至ったり、いけない場合であってもそのやり取りの過程や学びを大事にする学習方法です。「主体的・対話的で深い学び」とも言います。

谷頭こども園では、このような子ども達の『アクティブラーニング』を日常茶飯事に見かけます。例えば、砂場での水路づくりや鬼ごっこなどのルールのある遊びや基地づくり。室内では積み木を使った構成遊びなど。保育者が決して主導せず、子ども達が遊びを選択できる環境と空間、そしてたっぷりの時間があれば、子ども同士で決論を導いたり、協働で作ったり遊びや活動を進めることができます。毎日のドキュメンテーションを是非ご覧ください。子ども達の素敵な遊びや学びが紹介されています。

*アクティブラーニングは、教育界で今、最も注目されている学習方法の一つです。文部科学省が平成29年に公示した「新しい学習指導要領の考え方」に授業の改善と推進が記載されています。同年公示の幼稚園教育要領と認定こども園保育教育要領にも示されています。